

Japanese Wheelchair Project for Ukraine

オールジャパンで車いすをウクライナに送るプロジェクト（Japanese Wheelchair Project for Ukraine）の第2便 150台のうち140台が配布された同国西部テルノピリ州の子ども病院と養護施設、病院2カ所を4月24日から3日間にわたって訪問しました。（文と写真：在英国際ジャーナリスト、木村正人、史子）

土曜日の22日早朝、ロンドンからポーランド・クラクフ空港に飛び、長距離バスでウクライナ西部リビウへ。さらに小型バスに乗り換えて目的地のテルノピリ市に向かいました。国境の入国手続きは1時間20分弱で昨年6月に比べてかなりスムーズになった印象を受けました。乗客は週末だけウクライナに一時帰国する女性や子供連れの母親が大半です。

テルノピリ市に向かう夜道の灯りは小型バスのヘッドライトだけで真っ暗でした。午後11時前、バス停そばのホテルにたどり着き、お酒を買おうと近くのスーパーに飛び込みましたが、アルコール類の販売が許されているのは午後9時まで。ロシア軍がウクライナに侵攻した当初はアルコール類の販売は禁止されていました。



テルノピリ市

土曜日の23日、湖のようなセレト川の河畔はカップルや家族連れでにぎわい、これがロシアと戦争としている国かと思わせるのどかさでした。昨年6月にはリビウでもひっきりなしに鳴り響いていた空襲警報が聞こえることは一度もありませんでした。東部や南部の前線から遠く離れたテルノピリは多くの避難民、負傷兵を受け入れています。



若者やカップル、家族連れで賑わうセレト川河畔の公園

■ 州立小児臨床病院

州立小児臨床病院には「希望の車いす」「『飛んでけ! 車いす』の会」「海外に子ども用車椅子を送る会」から車いす 15 台、バギー 2 台が贈られました。25 日訪問すると、グリゴリー・コリツキー院長が「心から感謝しています。今日はこの病院のすべてをお見せします」と言って院内を案内してくれました。



州立小児臨床病院に届いた日本の車いす

ロシア軍の侵攻以来、405 床のベッドは満床状態で、院内は子どもや家族であふれ返っていました。「ロシアが占領している南部や東部から一時的に避難している人たちが常にいます。激戦地となったマリウポリを含めウクライナ全土の子どもたちが集まって来ます。私たちの病院はこの地域で唯一 24 時間体制のケアを提供しています」（コリツキー院長）



プールでリハビリをする母親と子ども

医師 165 人、看護師 310 人。夕方から夜にかけて、12 人の医師が夜間勤務しています。侵攻以来、合計して 1 万 5000 人の子どもが入院し、7000 人の救急外来、4500 件の手術を行いました。小児がん病棟では個室の子ども 1 人に 1 台の車いすが割り当てられ、「希望の車いす」の車いすが置かれていました。



小児がん病棟の個室の前に置かれた車いす



リハビリセンターで母親に車いすを押してもらった女の子

リハビリセンターでは「『飛んでけ! 車いす』の会」の車いすに乗った女の子がお母さんに押しってもらって、ニッコリ笑顔を浮かべました。院内の廊下でイミコラちゃん（3つ）の車いす（同会寄贈）を押していた母親のナタリアさん（29）は「リハビリが終わったら、車いすを頂けるそうです。2つの肩ベルトで固定されるので安心です」と話していました。



イミコラちゃんとナタリアさん

■地域特化型児童養護施設



地下を改造してつくった防空壕。空襲警報が鳴ると子どもたちを抱いて逃げ込んだ

地域特化型児童養護施設には「海外に子ども用車椅子を送る会」のバギーや車いす4台が贈られています。25、26の両日訪問し、利用状況を見学しました。昨年、空襲に備えて地下の部屋を子どもたちが長時間にわたって避難できる防空壕に改造しました。施設で暮らす8人を含む乳児から12歳児までの56人が入所しています。



「海外に子ども用車椅子を送る会」のバギーや車いすに乗る子どもたち

施設には孤児や両親と離れて暮らす子どもたちが多くいます。ロシア軍の侵攻で首都キーウから避難してきた脳性麻痺の12歳男児もいます。この施設では子どもたちのリハビリに取り組んでおり、外来の子どもも訪れるため、スタッフは総数約100人にのぼります。州ごとに1カ所しか児童養護施設がなく、予算も十分ではありません。



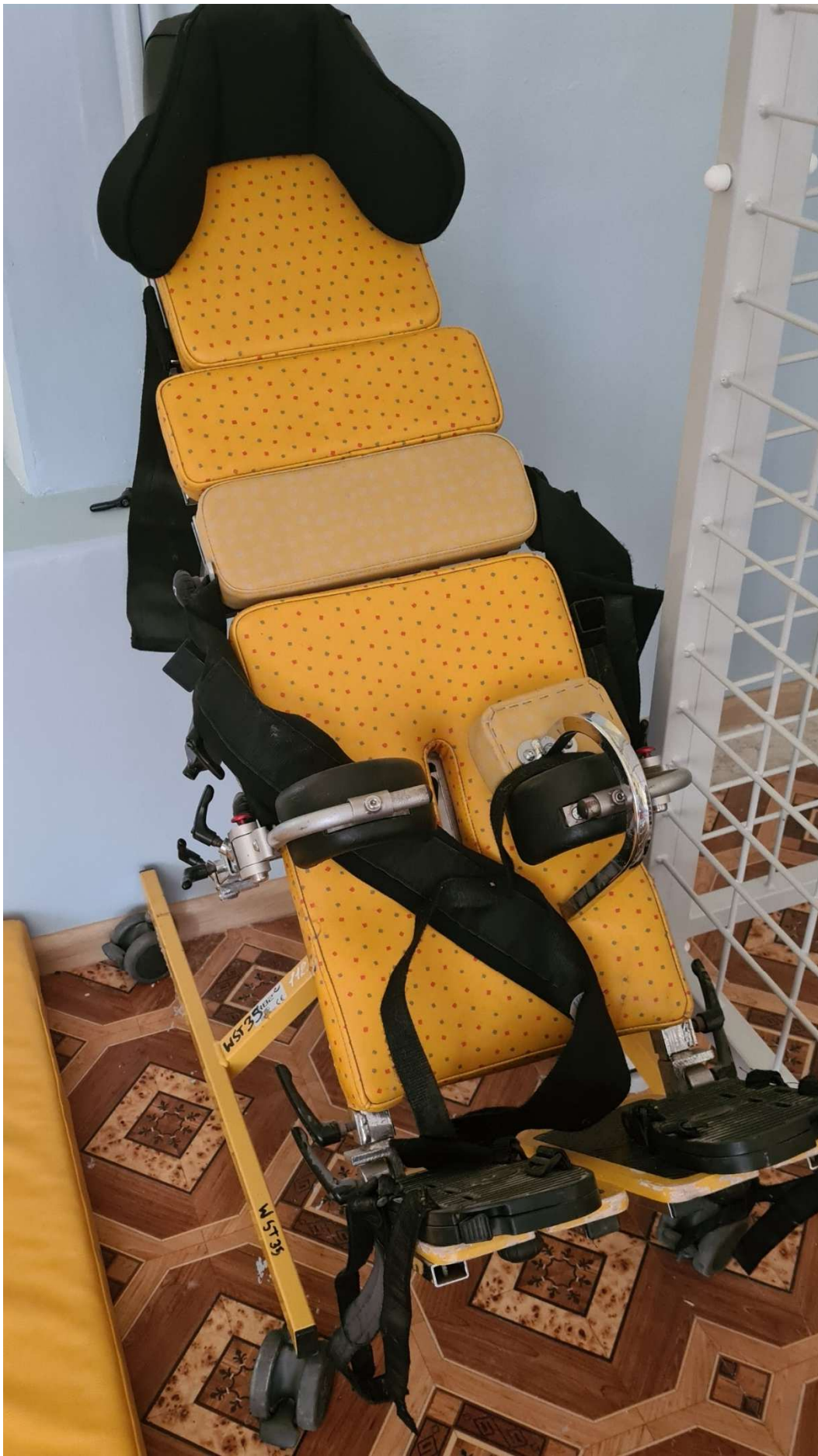
日本の車いすは軽量で機能性が高く、動きやすいと好評



男の子がキーウから乗ってきた車いすは重くて乗り心地が悪いという

車いすは寄付で当面、補えたものの、施設の建物は老朽化し、リハビリ器具も不足しています。インハ・クベイ所長は日本から寄贈されたバギーや車いすについて「ウクライナのものに比べて重くないので助かります。機能性も高く、動きやすいです」と感想を述べました。26日は医学部の研修生に日本製車いすに乗せてもらった子どもたちはうれしそうでした。

ウクライナではプライベート医療の割合が6割ぐらまで増えましたが、州立や市立など公立の病院や施設では原則、無償で医療・福祉サービスを提供しています。州ごとに2つの公立のこども病院と1つの児童養護施設があるという感じです。テルノポリ州では車いすは十分行き渡っており、リハビリ器具がほしいという要望がありました。



こうしたリハビリ器具が必要という

■リハビリ施設を備えた第3市立病院

リハビリ施設もある第3市立病院では21日に大人用の車いす14台が届いたばかり。「希望の車いす」の車いす5台が廊下でスタンバイしていました。ユーリー・ラザルチュク院長は「140床あるベッドの大半は負傷兵で埋まっています。入院患者の85%が負傷兵です。日本から寄贈してもらった車いすは当面、院内の移動用に使います」と説明してくれました。



第3市立病院に届いた「希望の車いす」

入院している患者数人に話を聞くと、ロシア軍が侵攻してくる前は学生だったり、農夫だったり、会社員だったり、普通の市民生活を送っていた人たちばかりでした。前線でロシア軍に狙撃されたり、地雷を踏んだり、砲弾で負傷したりしたそうです。片足を失った患者も目立ちました。



当面、日本の車いすは院内の移動に使われる

この病院では院内と院外で利用する車いすを分けているようで、届いたばかりの車いすは院外の散歩用にはデビューしていません。24、25の両日、訪問しましたが、午後3時すぎから家族に車いすを押してもらって公園や近くの通りまで出掛ける患者が5組ぐらいいました。公園に妻のオクサーナさん（23）と散歩に出掛けたサーシャさん（25）に声をかけました。



サーシャさんとオクサーナさん

26日に退院するサーシャさんは「東部ハルキウの自宅まで列車で20時間かけて帰るため妻と2歳の娘、実母が迎えに来てくれました。病院から提供された車いすに乗って帰ります」と話しました。しかし退院して家族のいる自宅に戻れる患者は多くありません。サーシャさんは頭部に重傷を負って手術を受けたため、戦場に復帰することはできません。



第3 市立病院のリハビリセンター

■戦時病院と化した州立病院

漏洩した米軍の機密文書によると、今年2月時点でウクライナ軍の死傷者は12万4500人～13万1000人で、戦死者はうち最大1万7500人とされています。米国はこれまでウクライナ軍の死傷者を約10万人と見積もっていました。ラザルチュク院長によると、外傷を負った患者の割合は20～25%から80～85%に跳ね上がりました。

特別タイプ1台を含む車いす15台が寄贈された州立病院には24日訪れました。日本の車いすは1週間前に届いていました。ピクトル・ザポロジェツ院長は「戦場で負傷した患者183人が入院しています。昨年4月から患者が増え、今年1月までに6000人の患者に2万回の手術を施しました。1人で何度も手術を受ける患者がいます」と言います。



州立病院に届いた車いす

患者の多くはリハビリを終えると戦場に戻ります。ロシアのウラジーミル・プーチン大統領が軍を撤退させなければ戦争は終わりません。頭部に重傷を負って家族の元に戻れるサーシャさんが幸せかどうか筆者には分かりません。日本の車いすも家族との散歩のお供をするようになり、いずれは故郷で生活のサポートをするようになります。



車いすに乗って院内を移動する患者

心を込めて整備、清掃された日本の車いすはきっと家族に希望を灯すことになるでしょう。

(おわり)